

棚田学会通信

第 38 号 2012 年 10 月 27 日

発行/棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院

高木徳郎研究室内

TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180



写真上・岩首棚田 下・小倉千枚田（提供：新潟県佐渡市役所）

◆巻頭言…世界農業遺産の認定と棚田ートキと共生する佐渡の里山ー／新潟県佐渡市長 甲斐元也…2 ◆佐渡
現地見学会 世界農業遺産『トキと共生する佐渡の里山』／ライター 石井里津子…4 ◆悲恋の歌姫と小浜市田
烏「御所平」の棚田／早稲田大学准教授 高木徳郎…5 ◆日本の棚田百選…山形県山辺町大蔵の棚田／山辺町農
村整備係 奥山健悦…6 ◆平成 24 年度活動計画・事務局ニュース…7 ◆会長就任・退任の挨拶…8 ◆編集後記

巻頭言

世界農業遺産の認定と棚田

ートキと共生する佐渡の里山ー

新潟県佐渡市長 甲斐 元也

■佐渡市の概要

佐渡市は、日本海に面する新潟県の北西約 40 km の海上に位置し、東京から直線距離で北西に約 300 km 離れています。

その面積は、約 855k m²、海岸線は約 280 km に及び、沖縄を除けば日本最大の離島で、佐渡産コシヒカリを筆頭にリンゴからみかんまで採れ、海洋性気候にも恵まれて、寒ブリ、黒マグロ、南蛮えびなど海からも豊かな恵みを受ける島であります。

2004 年 3 月に 10 の市町村が合併し、佐渡市が誕生しています。

佐渡市の米作りは平野部である国仲平野に約 4 千 ha、海岸沿いに海の近くから山あいの中山間地区と棚田で約 2 千 ha、合わせて、約 6 千 ha の水田があります。

米の生産量は約 3 万 t、生物多様性を育む農業をコンセプトとした「朱鷺と暮らす郷米」（佐渡産コシヒカリ）が有名であります。また、佐渡の人口のおよそ 8 倍にあたる年間 50 万人の主食用米が生産されています。

■佐渡金銀山と棚田開発、トキの生息地へ

1601 年、佐渡金銀山の発見により相川鉦山はゴールドラッシュで人口が急増しました。そして、佐渡の農業は世界文化遺産への登録を目指す佐渡金銀山の歴史と深く関わり合があります。

金銀山の発展で非常に多くの人口が集中したため、米等食糧の需要が増大したことにより、新たに山あいに棚田が開発されました。またそれらの水源として 1165 箇所ものため池が各地域に造成され、水田を中心とした重要な農業資産として継承されるとともに、美しい棚田の風景や生物多様性豊かなトキを育む水田も守られてきました。

人口の増加は、米だけではなく、野菜やわらじなどの産物も高く販売され、その農業経済の活性化から、小規模農家も生活ができるようになりました。その小規模ゆえに棚田やため池の里山景観を保全することができ、小規模ゆえ丁寧な米作りを実践し、農薬の使用も控えたことから、豊かな生物多様性が守られ日本のトキが最後に選んだ地になっていったと考えられています。

また、金銀山の恵みがもたらす豊かな農村からは様々な伝統文化が生まれ、豊作を願う農業神事として継承されています。その一つが能で、各地域で継承され現在日本にある能舞台の 3 分の 1 が佐渡に現存しております。現在も春から秋にかけて多くの住民や観光客が野外で上

演を楽しんでいます。佐渡の代表的な文化として、島内の 130 近い集落で継承されている「鬼太鼓（オンドコ）」は、約 500 年前に佐渡に伝わったとされる代表的な農業神事で、邪気を払い五穀豊穡を祈る農村集落の祭りとして、農業・農村の継承に大きな役割を果たしています。

また、棚田は森とのつながりにより、豊かな生物多様性を生み出しました。それがトキの生息地として有効であったと考えています。森、土の水路、水田とのつながりにより豊かな食物連鎖が作られ、維持されてきたことが要因であります。

こうした金銀山の発展は、農業から地域経済の活性化に繋がるとともに、棚田などの里山景観や伝統芸能・文化の創生と保全の役割とトキの餌場としての機能も果たしてきました。



多くの集落で継承される薪能(上)、鬼太鼓(下)

■世界農業遺産の認定

このように佐渡の里山は持続的に農業を営みながら、農業神事や伝統芸能が農村社会と密接に関わり合って守られてきました。

また、朱鷺と暮らす郷づくり認証制度を設立し、生きものを育む農法を新たな農業技術として加えた佐渡の取り組みは、トキをシンボルとした生物の多様性を育む米として消費者からご支持を受け、高付加価値販売だけでなく、交流など生産者との循環も生んでいます。このこ

とが評価され昨年（2011年）国連食糧農業機関（FAO）から世界農業遺産（GIAHS：ジアス）に日本で初めて認定されました。棚田を含む佐渡の里山や農家の取り組みは未来に継承すべき価値があるとして国際的に証明を頂いたものと考えています。

■新たな地域の創造へ

世界農業遺産に認定された以降、佐渡の棚田地域への注目度が以前にも増して高まっています。

そして、市の中山間地域の棚田を中心として連携した活動を行う佐渡棚田協議会を本年6月に発足することができました。

その中核となる小倉千枚田と岩首棚田についてご紹介いたします。



小倉千枚田



岩首棚田

小倉集落は、市の東部に位置し、この千枚田近くには国営事業による小倉ダムがあり、周囲は山に囲まれている自然豊かなところです。

佐渡奉行所が相川鉦山の人口急増に伴い、米不足を解消するため1650年から1673年までに58aを開田しました。その後は全部で約5haを開田し、約300年間耕作されてきました。

しかし、1975年ころからは、減反政策や農業従事者の高齢化に伴い耕作放棄が進み、耕地は約1haとなり農地、

観光資源としての価値が無くなっていました。

市は2006年に佐渡百選に選定されている千枚田の復活を地元で提案し、協議の結果地域の活性化を目指し、地元住民中心の「小倉千枚田復活事業支援協議会」を立ち上げました。協議会では、水田0.8ha（38区画）、畑地0.7ha（24区画）を復活し、2008、2009年の2カ年に渡り作付けを行ってきました。2010年以降は、全耕地1.5ha（63区画）を水田にして、棚田景観の維持に努めています。「オーナー制度」を導入するとともに、農業支援ボランティアによる農作業を導入し、都市との交流と保全の両立を図ることを大切に考え取り組んでいます。

もう一つの棚田である岩首集落は、小佐渡の海岸に面した中ほどに位置し、海拔約250mから400mの山腹に水田が連なっており、佐渡金銀山が発見されたころの慶長検地帳によると戸数22戸、水田面積約3haと記されています。そして、金銀山開発を背景とした開田により拡大され、1930年ころには北前船の豪商による高地開発で約27haに拡大、1981年の基盤整備事業完成時の耕作面積は約32haでした。現在は減反や耕作放棄により約23haにまで減少しています。

また、1970年代800枚ほどの棚田は、1981年完成の耕地整理により460枚ほどに減少しました。小さな田を変形のまま等高線状にまとめる工法が採用されたため、曲がって高い土手を持つ棚田の景観がうまく継承されるとともに、非効率な機械作業や過酷な草刈作業も残される結果となりましたが、集落をあげて棚田の保全に取り組んでいます。

しかしながら水田農業は、人々の命を支える食料供給の機能だけでなく、生物多様性の維持にとって重要な役割を果たしてきましたし、そのような水田を中心として維持されてきた農村地帯は、豊かな水と緑と人々の心のつながりによって、安定した社会と多様な文化の基礎を作ってきました。

二つの集落とも過疎高齢化が深刻な課題となっていますが、今後は佐渡棚田協議会の活動を通してオーナー制度や都市住民との交流などを活性化させ、多くの棚田サポーターからご支援を頂き、ともに保全できるような組織の育成を計画しています。

私たちは、世界農業遺産の認定を通して、農業・農村の持続可能な取り組みを目指さなければなりません。そして、棚田はそのシンボルでもあります。

「トキと共生する佐渡の里山」の再生と保全は、棚田の持続可能性が高まる農業へつながり、佐渡農業の活性化、豊かな生物多様性、農村コミュニティと伝統文化、そして美しい風景の保全にかならずや繋がるものと確信しております。

佐渡島において都市住民、NPO、大学など様々な皆様から参画を頂き、生物の多様性と環境と共生する新しい農業システム作りから、持続可能な地域づくりを目指してまいりますので、ご支援、ご協力をお願いいたします。

世界農業遺産『トキと共生する佐渡の里山』

ライター 石井里津子

トキの再生・野生復帰によって、佐渡島に熱い視線が集まっている今、佐渡に行かずして何処へ行こうぞ、とばかりに参加した。独自の歴史や文化を培ってきた風土の上に、「トキの郷」という魅力が加わった佐渡の現在はどんなであろうか。

ご存知の通り、トキは国鳥ではないのだが、その学名はニッポニアニッポン。なのに、1981年に保護された5羽を最後に日本のトキは消えてしまった。トキが、日本最後の地として選んだ（結果として選ばざるを得なかったのかもしれないが）場所が佐渡だった。

見学会シンポジウムにおいて、6月の時点で、再生したトキのうち91羽が島で放たれ、70羽羽の確認ができていると聞いた。トキは、森林と水田が接している場所を好むそうで、屋敷林などがある平野部の田んぼで多く確認されているとのことだった。ちなみに日本最後のトキが保護されたのは佐渡島の南のエリア、山や棚田の広がる地域。だが、現段階では「棚田を重点的に利用しているのは確認されていない」という話だった。

島の中央には国仲平野、南西には羽茂（はもち）平野が広がっている。平野からは丘陵地や山々が連なり、実は棚田も多い。つまるところ現在、耕作放棄地が多い棚田では餌となるミミズやドジョウを見つけづらく、利用しにくいのではないかとというのが専門家の見解であった。

トキのまなざしは、人の手がきちんと入った田んぼ環境が好き、というわけだ。トキに試されているような気になる。

こうした流れのなか2011年、佐渡市はFAO（国際連合食糧農業機関）による「世界農業遺産」に認定され、世界からも脚光を浴びはじめた。市をあげて「人と自然の共生を目指す、トキを育む生物多様性保全型農業」を推進してきた結果だ。

この認定によって、生物多様性保全型農業が、祭りなどの農村文化と共にあることも再認識したという。さら



に、そこで収穫された有機低農薬米を、佐渡市トキ保護募金への寄付をつけた「朱鷺と暮らす郷」としてブランド化し、売れ行きは好調だとも聞いた。

さて、トキのまなざしがある一方で、わたしは棚田の美しい景色を好む人間のまなざしも好きである。美しい棚田を荒らしてはいけないという感性や、美しい田園風景へ足を運ぼうというツーリズムが棚田地域の明日につながるかと信じている1人だ。

今回、佐渡島の代表的な棚田2か所に案内してもらった。まずは島の南端に位置する「岩首棚田」。そして、もう少し中心部に近い「小倉千枚田」。岩首棚田は、今回の見学会を受け入れ、お世話してくださった地元、大石惣一郎さんが守っている場所だ。

岩首棚田の中を歩いた。棚田の高みから海が望める。下の方の田より、上の方が田んぼ1枚の面積が広い。だから、上から見ると遠近法が強調されて、幾重にも重なった大輪の花びらのような重なり的美しさがある。

どこか牧歌的な感じがするのはなぜだろう。穏やかな風景だった。そう感じ取る理由を探し、きよろきよろ見ていると、獣害を避けるためのトタン板や鉄柵、電柵といった、いまや日本中の棚田や山里で見られる獣害対策がまったくない。大石さんにたずねると「佐渡にイノシシはいないですよ。大きな獣害はないんです」と返ってきた。

里山の美しさ、健全さがまだ、ここにはある。それが穏やかな風景の一因となっているようだった。

また、「小倉千枚田」は、一度荒廃が進んだものの復田がなされ、中世に開拓された景観を今に伝えていた。島ゆえに躊躇もしたであろうに、棚田オーナー制度にも取り組み、前へ進んでいるさまを知り、棚田保全のスタイルが日本中に広がり、一つの達成域に入っていることを感じ取ることができた。

見学会の最後、トキの森公園へ立ち寄った。ゲージの中、誕生したトキたちが、次の放鳥を待ち、羽をばたつかせている。トキの再生への取り組みが、地域活性化の旗手としての役割を果たし、先頭で大きく旗を振りながら明日を切り開かんとしていた。佐渡にとどまる話ではないだろう。明日のわたしたちの在り方を示唆しているようにも思えた。

小倉千枚田。平成19年より復田開始。平成22年より棚田オーナー制度もスタート



岩首棚田(約23ha)で、大石さん。名刺の肩書きは「佐渡棚田びと」

悲恋の歌姫と小浜市田烏「御所平」の棚田

早稲田大学准教授 高木徳郎

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の
人こそ知らね乾く間ぞなき
(『千載和歌集』巻12 恋歌2)

この和歌は、後白河天皇の子・二条天皇に仕えた二条院讃岐という女官によって詠まれたものである。ここに詠まれている沖の石とは、福井県小浜市の黒崎半島(田烏半島)北西約2キロの沖合に浮かぶ岩礁を指し、引き潮であっても常に波に洗われ、乾く間もない



二条院讃岐居館跡の碑

その様子と、悲恋にむせび、いつも人知れず涙で袖を濡らす我が身とが重ね合わされている。二条院讃岐は、源平内乱でいち早く反平氏の旗を揚げ宇治平等院の戦いで散った源三位入道頼政の息女で、二条天皇の即位直後からの作歌活動が知られている。内裏和歌会にもたびたび出詠する宮廷歌人であったが、二条天皇の死去に伴っていったん宮中を退き、その後、後鳥羽上皇の中宮・任子(宜秋門院)に再出仕して藤原定家らとともに後鳥羽歌壇でも活躍している。この歌により、讃岐は「沖の石の讃岐」との異名をとるようになり、定家編纂の小倉百人一首(92番)にも収められて、広く知られるようになった。

ところで、二条院讃岐が住んだと伝承される地が、この沖の石をはるかに望む小浜市田烏の御所平にあり、そこには若狭湾を眼下に望む風光明媚な棚田が広がっている。その中の一枚の田の傍らに「二条院讃岐姫居館跡」の碑が建てられ、確かにそこからは、水平線より僅かに手前の海中に浮かぶ沖の石をみることができる。棚田と悲恋の歌姫の取り合わせが何ともロマンチックだが、なぜ讃岐は、都を遠く離れて、この地に住んだのだろうか。

讃岐は、二条天皇の宮廷を退いた後、のちに源頼朝の側近の一人となる藤原重頼と結婚する。実はこの重頼は、若

狭国宮河保・松永保の地頭として、その「非法」を若狭国司より訴えられていた人物である(『吾妻鏡』文治四年九月三日条)。宮河保は、御所平の南に隣接する地であり、讃岐の夫は御所平のすぐ近くに活動基盤をもっていたことが分かる。また、鎌倉時代の文永年間には、おそらく重頼の子孫と考えられる「宮河地頭殿」が、「さぬきの尼御前のあとになり」と称して、田烏浦を支配しようとした企んでいた徴証もみられる(秦守高注進状、『秦文書』)。この人物の主張によれば、御所平を含む田烏地域は、かつて讃岐の所領であったとみる余地さえあるということになる。実際、地元には、「宮河保内黒崎山」を「讃岐尼御前御領」と記す文書も伝えられている(矢代浦刀禰重員等連署注進状写、『秦文書』)。御所平の地名は、鎌倉時代末期には史料上に登場するので(田烏浦分金井山畠別帳、『秦文書』)、讃岐がこの地に住んだという説は、かなり早くから地元には広まっていたようである。史料的な確証に乏しいが、讃岐が宮河保の地頭を務める夫に伴われてこの地にやって来て、実際に住んでいた可能性も相当に高いのではなかろうか。

いま、筆者の関心は、この御所平が一体いつ頃から棚田になったのだろうかということに注がれている。中世以来の漁村であった田烏では、塩の生産も盛んだったことが知られている。中世における塩の生産には大量の薪が必要であり、田烏周辺にも塩木山と呼ばれる山林が広がっていたはずである。しかし鎌倉時代後半には、その塩木山もじょじょに焼畑などに変わっていった(春田直紀「水面領有の中世的展開」、『日本史研究』373)。では、その焼畑がいつ頃から棚田になったのか。この小文もようやく書き終えたので、明日からはこの謎解きの旅に出るとしよう。

若狭湾に臨む御所平の棚田



日本の棚田百選

山形県山辺町大^{おおわらび}蕨の棚田

山辺町産業課農村整備係 奥山 健悦

山辺町の中心部から西方向に10kmほどの山あいをめうように車を走らせると、眼下にすり鉢状の大蕨集落が広がってくる。その集落を見下ろすように「大蕨棚田」がある。上部はすぐ山に続いており、この上流には家屋等は無く、下方に集落が続いている。

用水源は上流部の雑木林等から浸み出るきれいな湧水を利用している。昔は限られた用水の利用について時間と順番を決めた「番水^{ばんすい}」制度を導入して水争いが発生するのを防止していた。現在では互いの暗黙のルールにより水管理を行っているのが実態であります。

「大蕨棚田」は平成11年度に面積3.4haが棚田百選に認定されましたが周辺の田圃と併せて16haを平成20年7月に山形県では棚田20選として認定をしております。

大蕨地区の人口は300名たらずであり60歳以上が40数%と高齢化が進んでおり、実際農業を行っている方の平均年齢は70歳代の前半となっております。

高齢化や担い手不足から年々不作付地や転作田が拡大していった状況でありました。

平成23年3月に「山辺町」「モンテディオ山形」「地域住民」の三者が一体となり棚田再生と地域の活性化を目指して大蕨地域活性化棚田再生事業協議会が設立されました。

地元山形のJリーグ・モンテディオ山形の選手たちに田植えや稲刈りなどに協力してもらい取れた米を「モンテ棚田米」と名付けて販売し、使用したロゴのロイヤリティをモンテディオの支援資金として提供するシステム



であります。

事業を開始してまだ2年目であり、昨年は40aでしたが今年度は70aに規模拡大しました。田圃が増えることにより、モンテディオのサポートにもなりお互いが「win・win」の関係でなかなか面白い事業と考えております。

選手たちは、田植えや稲刈りの時期に合わせて地区を訪れて、農作業を行い秋の収穫祭には、地元の子供たちや活動に参加してくれた人が車座になっておにぎりや山形名物の芋煮汁が振る舞われ、交流を通じて地域に明るい笑い声が広がり賑わいを見せております。

棚田百選に認定されて10数年が経過しております。認定された当初は転作田も無く秋の稲刈後の「杭掛け」が何百本と林立する光景は圧巻でした。高齢化や担い手不足で徐々に不作付地が増えてきたときに、昨年からは新たな試みとして棚田再生協議会を立ち上げて実行されており、少しずつではありますが、棚田が再生されていく様子を見ると大きな喜びを感じるところであります。今後は棚田の再生をきっかけとして新たな地域づくりの動きが出てくることを願っております。年々高齢化が進ん

でいくことは確かかも知れませんが、ただ住んでいる人々が日々の生活を生き生きと楽しく過ごすことにより地域の活性化が図れることになると考えております。

最後にモンテディオ山形の日も早いJ1復帰を願っております。



平成24年度 活動計画

1. 棚田学会大会 1回開催（平成24年大会：平成24年8月5日開催）
2. 理事会は、原則として、偶数月の、第2土曜日の午後に開催を予定
3. 棚田学会誌『日本の原風景・棚田』第14号の編集
（第13号は平成24年7月31日発行）
4. 棚田学会通信（第38、39、40号）の発行
5. 談話会・若手研究者発表会・現地見学会・研究会を開催
6. 第9回石井進記念棚田学会賞の公募、選定及び学会賞基金への募金要請
7. 平成24年度予算（平成24年7月1日～平成25年6月30日）

1) 一般会計

収 入 の 部		支 出 の 部	
事 項	予算額	事 項	予算額
会費収入	1,410,000	旅費	60,000
普通会員 310名・年×4,000円	1,240,000	講師旅費	50,000
学生会員 5名・年×2,000円	10,000	連絡旅費	10,000
賛助会員 10名・年×10,000円	100,000	謝金	20,000
法人会員 2団体・年×30,000円	60,000	印刷費	1,190,000
		会誌第12号(B5、136頁)	990,000
		学会通信 50,000円×3回	150,000
		大会資料等	50,000
図書販売	50,000	通信・郵送費	200,000
会誌	50,000	会誌発送費(第12号)	26,000
		学会通信発送費(3回)	76,000
寄付	200,000	郵送費(メール便、ゆうパック等)	78,000
(公財)損保ジャパン環境財団	100,000	通信費(電話、FAX、切手代等)	20,000
他	100,000	ホームページ運行費	20,000
		会議費	40,000
		理事会、編集会議他	40,000
前年度繰越金	626,305	会場設営費	250,000
		大会運営費	240,000
		談話会	10,000
		消耗品費	30,000
		事務所経費	60,000
		振込手数料	6,000
		予備費	410,305
合 計	2,286,305	合 計	2,286,305

2) 特別会計

収 入 の 部		支 出 の 部	
事 項	予算額	事 項	予算額
棚田学会賞基金募集予定	100,000	棚田学会賞	40,000
		賞状、盾製作費	40,000
前年度繰越金	279,839	旅費交通費	180,000
		次年度繰越金	199,839
合 計	379,839	合 計	379,839

===== 事務局ニュース =====

談話会のお知らせ

◆講演者と演題

1. 講演者：青木 勝 氏
（山古志アルパカ村代表、元長岡市山古志支所長）
演 題：山古志の棚田と村 ～復旧・復興8年を経て～
2. 講演者：篠原 孝 氏（衆議院議員）
演 題：TPPの行方と棚田の保全

◆日時：平成24年12月8日（土）13：00～

◆場所：早稲田大学早稲田キャンパス 14号館 804 会議室

◆参加費：資料代 500円(会員、学生は無料)

◆お問い合わせ&お申し込み先

E-Mail: tanadagattukai@yahoo.co.jp FAX: 042-386-8355

「論文・事例研究・報告」の募集

学会誌14号への論文等の投稿を受付ます。詳しくは投稿規程をご覧ください。投稿締切日は下記の通り。

論文…平成25年2月末日

事例研究・報告…平成25年3月末日

☆

石井進記念棚田学会賞基金の募集

棚田学会賞基金への募金を募ります。

1. 募 金 額 1口5,000円（1口以上）

2. 口座番号 00150-2-125247 棚田学会

※郵便振替用紙に「棚田学会賞基金」とご記入の上、ご送金下さい。



第4代棚田学会長に就任して 棚田学会会長 千賀裕太郎

国立大学法人 東京農工大学大学院農学研究院教授

このたびはからずも第4代棚田学会長に推挙され、とても重い責務を感じています。

平成11(1999)年の棚田学会の設立以来、全国棚田千枚田連絡協議会やNPO法人棚田ネットワークと連携しつつ、各地域における棚田保全活動を活発化し、棚田への市民の関心を拡大するとともに、国や自治体の棚田支援制度の展開を導き出し、そしてとりわけ「棚田(保全)学」ともいえる新たな学問分野を切り拓きつつあることは、歴代の正副学会長及び理事メンバーはじめ全ての学会員の方々のご尽力の賜物と、敬意と感謝を申し上げる次第です。

さて思うに、棚田学会の特徴は2つあります。第1は、「棚田の保全に向けた活動を推進すること」を学会の目的とし(会則第2条)、さらにその目的を達成するために、「学会誌、学会通信の発行、研究会の開催、現地調査、見学会の開催、その他本会の目的達成に必要な事業を行う」(同第3条)としていることです。このように会則で、学会員の研究対象そのものの「保全」を学会設立の「目的」として明示した学会は、他にほとんど見られません。もちろんこれは「棚田」が各地で衰退・消滅の危機に瀕しているからです。

第2の特徴は学会員の属性です。学会員は研究者に加え、農業者、市民、行政関係者、学生などバラエティーに富み、それゆえにこそ、多彩な学会活動のスタイルが生み出されています。また研究者の学会員だけとって、人文・社会科学系から自然科学系まで多様な学問分野に及んでいます。

ところがこのようにユニークな棚田学会が、いま最大の試練に直面しております。それはアメリカが「禁じ手」とも言えるTPP(環太平洋経済連携協定)の締結を公然と日本に迫りつつあることです。TPPは20を超える多分野における徹底した関税撤廃の協定であり、農山村の棚田地域の経済を根底から破壊することは必至です。(当学会員の篠原孝代議士が「TPPはいらない!」を日本評論社から出版されています)農水省もTPPが締結されれば食料自給率が現在の39%から一気に11%に減じると予想しており、中山間地域に立地する棚田は文字通り風前の灯と言わざるを得ません。(もっとも、ほんとうの被害者は都市民なのですが)

こうしたときに、学会として何ができ何をなすべきか。私は学会長として、これまで13年にわたって積み上げてきた豊かな学会活動を継承し発展させるとともに、今期はさらに次の『二つの行動』を呼びかけたいと思います。

第一は、棚田地域支援の新たなあり方の実践的な検討です。第二は、TPP締結を押しとどめる活動です。いずれも学会らしい活動のあり方に知恵を絞りながら、文字通り棚田保全に向けた学会活動を推進しようではありませんか。会員諸兄のご理解とご参加を心から呼びかけるものです。

会長を退任し顧問として会長を支えます 棚田学会顧問 中島 峰広 早稲田大学名誉教授



1999年8月、棚田学会発足と同時に副会長に就任、2001年10月初代会長石井進さんの急逝にともない会長代行を務めました。2002年8月木村尚三郎さんが第2代会長就任により副会長に復帰、2006年10月木村さんの急逝により、再び会長代行になりました。このため、2007年8月、第3代会長に就任するとき「私が第一になすべき責務は任期を無事に終えることであり、さもなければ第4代会長になる人がいなくなるからです」という会長挨拶を行いました。このような事情から、2010年11月心筋梗塞で緊急入院した時、第4代会長につなげるまでは絶対に死ねないという思いで治療に専念、この度無事に任期を終えることができました。

石井さんの急逝後、会長・会長代行・副会長を務め、実際に学会を牽引する役割を担った11年間、学会の使命である機関誌「日本の原風景・棚田」は毎年着実に出版され、若手研究者の発表会を開くなどの成果により、最近では論文数が増える傾向にあります。また、年に数回開く研究談話会や現地見学会も充実した内容で行っており、学会独自の事業として創設した棚田研究と棚田保全に顕著な業績のあった研究者や保存団体に学会賞、若手研究者に奨励賞を授与することも8回に及んでおります。

懸念されることとしては、会員数の減少が続いていること、それに伴う深刻な財政的な問題があることです。しかし、この問題については有能な次期会長千賀さんが解決の道を拓いて下さるものと信じており、私も微力ながら顧問としてとどまり、会長を支えたいと思っております。

編集後記 誌面の雰囲気が少し変わったことにお気づきの方もいらっしゃるかも知れません。このたび編集担当の一部が交替し、新しい体制で「棚田学会通信」「棚田学会誌」の編集に臨むこととなりました。新しい編集子としましては、少しずつ新機軸を打ち出したいとも考えており、この「棚田学会通信」を会員と会員をつなぐ「広場」にしたいと思っています。どのような形となるのかまだまだ未知数ですが、皆さまのご協力も賜りまして、いつか棚田を彩る黄金色の穂のような実りが得られれば望外の幸せです。皆さまには、よりいっそうのご愛顧とご声援をお願い申し上げます。(高木徳郎)